
グアムに生きた二十八年

横井庄一さんの記録

朝日新聞特派記者団

グアムに生きた二十八年

横井庄一さんの記録

朝日新聞特派記者団

朝日新聞社

グアムに生きた二十八年

・ 横井庄一さんの記録 ・

昭和47年2月25日第1刷

450 円

著 者 朝日新聞特派記者団
発行者 朝日新聞社 角田秀雄
印刷所 凸版印刷株式会社
発行所 朝日新聞社 東京／名古屋
大阪／北九州

© 朝日新聞社 1972

0036-253994-0042

目

次

1 発	見（一九七二年一月二十四日）	5
2 取調	べ（二月二十四日）	13
3 最初の記者会見	（二月二十五日）	21
4 グラム	'72	33
5 戦記		47
6 日本人記者団到着	（二月二十五日）	61
7 生立ち		85
8 “戦友”との対面	（二月二十六日）	93
9 日本政府代表きたる	（二月二十七日）	105
10 穴ぐらへ	（二月二十七日）	113
11 生活用品		129

12 亡 霊（二月二十八日）

13 病室で

14 医師たち（二月二十九日―二月二日）

15 送別会（二月一日）

16 日本へ（二月二日）

17 羽田で（二月二日）

18 衝 撃

〈付〉 グラム警察報告書

あとがき

217 209 193 185 177 169 161 149 139

口絵撮影 朝日新聞特派・出版写真部石川文洋
装幀・口絵レイアウト 杉田礼三
〔カバー写真（裏）〕二月二十四日メモリアル病院前で

1
発

見
(一九七二年一月二十四日)

一九七二年一月二十四日のことである。

グアム島の南部、タロホ村の住人ジュース・デュエナスさん（46）は、義兄とふたりでタロホ川の分流にそって歩いてた。

あたりは、いちめんのカヤ原である。カヤ原といっても、カヤは背を没するほど深く、歩くのは容易でない。義兄はエビをとるためのウケを、そしてデュエナスさんは猟銃を手にしていた。この付近には大きなヘビがいるし、野ブタや鹿もいる。うっかり野ブタをおどかさうものなら、イノシシみたいに襲ってくる。だから銃は手放せない。仕とめれば、たいへんなご馳走だ。

「さて、ウケをどこに仕掛けたものか」

ふたりは小高い丘に立って見渡した。太陽は落ちて、夕闇が迫っていた。そのとき。「あれはなんだ」と義兄がいった。カヤ原の一カ所が風もないのに動いているのだ。

「牛だよ」とデュエナスさんはこたえた。しかし、目をこらしてみると、人間のようでもある。

「下の村のガキだ。しょうがないヤツだ。いまごろ、あんなところで何をしてるんだらう。連れて帰らない」とデュエナスさんはつぶやいた。

ふたりは斜面をおりて、子供を待ちうけた。とは知らぬ少年は、カヤをかきわけ、かきわけ、いきなりふたりの前に姿を現わした。とたん、ふたりはギョッとして立ちすくんだ。少年ではなかった。現れたのはヒゲをボウボウにのばした幽霊のような老人だった。

「日本兵だ！」と義兄が叫んだ。デュエナスさんは夢中で銃を構え、「とまれ！」とどなった。

ふたりよりもっとおどろいたのは老人のほうだった。彼は右肩にウケをかつぎ、左手にもうひとつのウケをぶらさげていたが、それを放りだすと、拝むように両手をあわせ、

「あーん」といった。その顔は恐怖でひきつっていた。双方、十秒ほどにらみあっていた。と、老人は手をあわせたままデュエナスさんのほうに近づいてきた。そして、いきなり彼の左腕をつかみ、もういっぽうの手で銃身をむずと握った。デュエナスさんは思わずのけぞり、じりじりとうしろへさがった。なにしろ猛烈な力なのだ。あとずさりをしているうち、片足がドロにはまった。あわてて銃を義兄に渡し、力いっぱい老人をなぐりつけた。老人が倒れたところをとびかかって、難なく組伏せた。義兄がヒモを渡した。デュエナスさんはヒモで老人をうしろ手に縛り、引きおこした。

老人——と思ったのだが、よく見ると年は五十歳ぐらいだった。やせて、青白かった。ナン

キン袋でつくったような半袖シャツに半ズボン、そして素足だった。放りだされてあった竹製のウケを拾うと、デュエナスさんと義兄は、その男をじぶんの家まで引立てていった。男はふらふらしていた。灌木の茂みを抜け、ガケをのぼり、急斜面をくだり、三人はゆっくり、ゆっくり歩いた。あたりはもうすっかり暗くなっていた。

男は飢えていた。道々、哀願するようにいった。「タベモノ アル?」「タベモノ クレ」

デュエナスさんは義兄と顔を見合わせた。そして用心しながら男をしばっていたヒモを解いてパンケーキを与えた。男はそれをちぎって口に入れると、残りを大事そうにポケットにしまった。三人とも、すこしずつおちついてきた。デュエナスさんと義兄マヌエル・グラシアさんは、知っているかぎりの日本語で男を安心させようとした。

「コンパニー（友だち）、ワタシ、上等コンパニー」そして手まねで、「タベル アル、カエル（おれの家に帰れば、たべものはたくさんあるよ）」

デュエナスさんの家はタロホホ川の河口から、一・五キロぐらいさかのぼった丘の上にある。十五年ほど前、彼はグアム政庁からこのあたりの土地四ヘクタールを借りて、開墾しはじめたのである。キュウリやキャベツなどの野菜をつくり、タロホホ川でエビやウナギをとり、

たまには野ブタや鹿をうちにいく。半農、半漁、そして猟師でもある。

丘の上の家は、家というよりトタン小屋に近い。そう、二、三十坪もあろうか。そのトタン小屋に三家族、総勢二十八人が住んでいる。一時間ほどかかって、その「わが家」にたどりつくと、デュエナスさんは男を土間のまんなかのイスにすわらせた。二十八人の家族全員が彼をとりまいた。一歳と一カ月の赤ん坊までが。

男はしきりに「ミズ ミズ」といった。デュエナスさんはコーヒーを入れて飲ませた。その間に、妻と娘が食事をつくった。オックステールのスープ、サバ、牛肉、ライスが木のテーブルの上に並べられた。男はまっ先にサバを骨だけ残してきれいに食べた。ぜんぶ食べおわると、「モット ゴハン」といった。

「だめだよ、いきなりそんなにたべさせちゃあ。水も少しにしないと死んじゃうぞ」と軍隊経験のある息子がそばからいった。

食事がおわると、男は落ちついてきた。落ちついて、ゆっくりあたりを見まわした。土間に裸電球がひとつぶらさがっている。その電球に照らされて隅に立てかけてある四丁の猟銃が鈍く光っている。しかし、彼はもうおびえていないようだった。一生懸命つくり笑いをしていった。そして、彼をとり巻いた子供の一人を指さして、

「ワタシモ オナジ コドモ アル イチ、コドモ（ひとりの子供） イチ、オナカ（ひとりはまだ妻のおなかのなかだ）」と身ぶりで話した。

「タバコのむか」と義兄がさしだした。

「ダイジ ヨウブ」と男は手をふって断った。

「キッコマン」とデュエナスさんの妻が、キッコマンのシヨウウのびんを見せた。

「ダイジ ヨウブ」と男は手をふった。びんには英文のレッテルが貼られてあったので、彼はシヨウウと思えなかったのだ。オイのホセ・ナプチさんが、彼のシャツをさわった。彼は、びくっとしたが、すぐ手まねで説明しはじめた。この服はバゴの木の皮でつくったこと。たったひとりで穴ぐらのなかに二十年以上も暮していたこと。カタツムリやネズミを食べていたこと。野ブタを食べたとき、おなかをこわし一カ月も苦しんだこと……。

デュエナスさんは、男をしげしげとながめた。あれはいつだったか。もう二十年以上も前になるが、当時十五歳だった弟と二十二歳のおいの二人が、きょうのようにウケをあの辺に仕かけに行った。行ったきり帰ってこなかった。さがしに行くと、ふたりは手足を切られ、腹を刺されて死んでいた。残存日本兵の仕業だ、と思った。

「しかし……あれはもう過ぎたことだ。いま、ここにいる日本兵をうらむ気になれない」

こんな姿の人間を、さっき、あんなにひどくなぐりつけたことが、しきりにくやまれた。

「さ、出かけよう」とデュエナスさんは義兄にいった。義兄がおもてに出てジープのエンジンかけた。男はギクッとしたようだ。それをなだめるようにデュエナスさんはいった。

「ダイジョウブ ソンチョ（村長のところへ）イク ダイジョウブ」

男はすなおにジープに乗った。グラシアさんの運転するジープは赤土の道を大きな音を立ててタロホホ村役場へバク進んでいた。

2
取
調
べ
(二月二十四日)

